

=====
ふくしま

2017. 11. 7

復興支援フォーラムニュース No. 119

(URL <http://www5a.biglobe.ne.jp/~tkonno/FK-forum.html>)

<事務連絡先> 今野順夫 (tkonno67@gmail.com)

=====

【第117回ふくしま復興支援フォーラム/2017年11月7日】

「福島大学環境放射能研究所の研究活動と復興支援」

所長・難波謙二

<環境放射能研究所の紹介>

環境放射能研究所の設立

震災直後、福島大学には放射線測定装置は1台もなく、他大学等から借りて、または譲り受けて、測定を開始した。その後1年の間に理工学類や未来支援センターに整備された装置で環境放射能を対象にした研究が行われるようになった。食品モニタリングや住民への被ばく線量の測定等は行政機関がスキームを整え、確立していく一方、環境中での放射能の動きや動植物への放射能の移行メカニズムなど、将来予測に必要な研究の必要も生じて来た。また、震災直後から、環境放射能を対象として研究を行った実績のある海外の研究者が、チェルノブイリ事故後の研究等過去の知見を元にした支援を申し出るといふことや、さらなる研究を行うために訪問するということもあった。これによって、世界で見ても稀にしか起こらない原発事故の教訓を、研究者組織の立場で残し、次の事故に活かす取り組みが、国際機関や、原発を保有する国、自国には原発を持たないが近隣に原発がある国などで、行われていることが知られるようになった。これらのことを背景に福島大学に環境放射能を対象とする研究所を設立するという構想が立ち上がり、国内で環境放射能の研究を行って来た実績のある研究機関や大学からも支援を受け、これらの機関と連携推進会議を通じて連携運営するという方針で、2013年7月に環境放射能研究所が設立された。

人員と設備

2013年の設立時、研究者は理工との兼任のみだったが、設立直後から研究者を公募し、2013年11月から、チェルノブイリ原発事故後の研究や対策に関わったウクライナ人およびロシア人研究者が研究所に加わった。2015年には研究者がほぼ揃い、5部門15分野を組織した。現在、教授3、准教授2、講師2、特任教授3、特任准教授1、特任助教1、プロジェクト研究員1が専任研究者として所属している。この13名のうち5名が外国人である。以上の本務研究者以外に兼務教員として、福島大学理工学類と兼務が、所長を含め8、筑波大学との兼務が1となっている。また、事務室は11名が所属しているが、この中には分析チームの研究員、ウクライナ駐在現地調整役が

含まれる。また、所属する外国人研究者や短期訪問の外国人対応のために、事務で取り扱う書類も英訳の必要が発生することや、生活上のサポートも必要となる場面があり、3名が国際コーディネータの事務室員であるが、これ以外の事務室員も

施設については、2014年には2階建て分析棟（床面積1,400㎡）が完成し、ウエル型や広エネルギー型およびサンプルチェンジャ付きを含め、あわせて10台のゲルマニウム半導体検出器や、各種の質量分析装置等が棟内に設置された。2017年3月には、6階建て本棟（床面積、平屋の試料保存棟と合わせ4,700㎡）が完成し、2017年6月に引越が完了し、関係機関等を招いた竣工式と近隣町内会はじめ一般市民を対象にしたおひろめ会をそれぞれ行った。

研究活動

研究活動としては、6つのプロジェクト立ち上げ、主に福島県内での調査研究が進めてきた。これは5部門15分野の組織とは必ずしも一致していない。簡単に紹介すると、雨や河川など水的作用に伴って環境中を放射能がどのように移動するのかを調べる「河川・湖沼（プロジェクト、以下略）」、微量分析技術を使って、太平洋に放出された事故由来の放射性セシウムの量的評価や海流による北太平洋の移動を研究対象にする「海洋」、農林水産業を視野に入れ、植物、淡水魚類、ほ乳類を対象に放射性セシウムの意向状況や生物影響を調査する「生態系」、新しい分析手法や機械やロボットの技術を使った新しい計測と試料採集の手法を開発する「計測・分析」、放射性セシウムの粘土粒子への吸着を始め、放射性物質の環境中での科学的・物理的形態を調べる「存在形態」、環境中の放射性物質の動きをモデルとして数式に表現し、現実に観測された変化を計算で再現するとともに、過去に起きたものの観測できなかった現象や、将来起きる現象を推定・予測する「モデリング」の6つのプロジェクトである。

海外での研究活動

2017年からはSATREPS課題として採択された「チェルノブイリ災害後の環境管理支援技術の確立」を本格始動している。このプロジェクトの研究活動には、原発に冷却水を供給していたクーリングポンドの原発廃止措置に伴う水位低下の影響のモニタリング強化や研究、チェルノブイリ立入禁止区域内の有効利用に関わる放射能動態の把握、立入禁止区域からの大気を通じた長距離の輸送に関する研究を含んでいる。このプロジェクトはウクライナ側への最新分析装置等の機材や新たに開発された技術の供与という支援の要素も重要であるが、これは、福島第一原発の事故後の対策や研究の上での技術的サポートを実現していただいたウクライナの政府や研究機関の方々に対するお礼という側面もある。また、原発事故からの年数が25年多いチェルノブイリでの環境放射能に関する知見は、福島の特に帰還困難区域の将来予測に役立つものと期待される。

研究活動の説明

環境放射能研究所では2014年3月から毎年「成果報告会」を開催してきた。この発表では一般の人を想定して分かり易く説明することを目指すとともに、同じ福島の各地域を対象として研究を行っている他の研究機関や大学等にも発表して頂いている。

さらに、2016年からは、これまで研究にご協力頂いた方々や地域の方々に向けて、「研究活動懇談会」を開催している。福島県の中でも、地域や対象によって異なる問題や課題があるため、地域ごとに問題や課題を絞って、研究成果を発表し、さらに地域の方々や関係者の方々と懇談の場を設けることを始めた。1回目は浪江町で、イノシシの調査でお世話になっている浪江町猟友会の方々にも参加いただき、浪江町内での野生動物の研究活動の紹介をもとに懇談を行った。その後、それぞれ、ため池と周辺土壌、河川・ダム湖、海洋の環境と海産魚をテーマに、今年の7月までに大熊町、南相馬市、いわき市で合計4回の研究活動懇談会を開催した。地域の皆さんとも直接的に対話することで、住民の方々から新たな研究課題のヒントをいただくことがあるため、研究所としても有意義なものと考えている。次回は11月25日に帰還困難区域で起きている生態学的現象を中心とした研究活動懇談会を東京で行う。東京での開催は初めてである。

課題

現在2019年4月開始に向けた大学院設置の準備が進められている。理工学研究科内の別専攻となる予定である。また、共同利用共同研究拠点として文科省から認定を受けるべく、筑波大および弘前大と準備を行っている。現在の環境放射能研究所本棟はこれらの利用を想定した設計となっている。

環境放射能研究所は主として理工学類・理工学研究科と一緒に研究活動等を行って来た。福島大学食農学類がスタートすると、環境放射能研究所と共通の課題に取り組むことになるので、当然、協力関係を築いていくべきだろうと考えている。

環境放射能研究所では、研究分野として「アーカイブ」をおいている。今後、震災後文科省が行ったいわゆるマップ調査で採集された土壌試料を始め、系統的に採集され、統一的な分析が行われた初期の試料を中心に、原子力規制庁から受入れ、環境放射能研究所に保存する計画である。これらは新たな分析手法の出現などにもなって、再分析の対象となる。

情報のアーカイブでは、日本学術会議が初期に測定された測定値のアーカイブの重要性を議論して来た。国や県など公的機関が計画的に測定した測定値は原子力機構がデータベース化したが、一般の方々や、病院等で事故直後に測定した放射線量の値は直後にはネット上にあったものの、次第に消えつつある。これについても、学術会議では保存を強く勧めており、学術会議の当該WGメンバーがアーカイブ化の設計を進めてきた。福島大学環境放射能研究所では県内のさまざまな震災・原発事故アーカイブ機関やアーカイブに関心を持つ機関等とアーカイブ関連の協議をしてきた。私としては、地域をベースにしたアーカイブ化が最適と考えられるので、この非公的測定のアーカイブについても協議対象にしたいと考えている。

参考

「らら・カフェ」2017年秋号(vol.40)、第一印刷、福島。(最近の状況が書かれています)
福島大学県境放射能研究所ホームページ <<http://www.ier.fukushima-u.ac.jp>>



<第116回ふくしま復興支援フォーラムでのご意見等>

2017年10月5日、第116回ふくしま復興支援フォーラムを開催しました。多田曜子さん（復興ボランティア支援センター事務局）から、「山形県内の避難者支援の取り組み～これまでとこれからへ向けて～」について、報告をいただきました。29名の市民が参加し熱心な質疑応答がありましたが、会場で文書によるご意見・感想などが寄せられました。以下に掲載しますので、参考にしてください。

~~~~~

★ 昨年、米沢市に避難者支援のお話をうかがいに行きましたが、行政と民間が協働しながら支援を継続されていることに感銘しました。今日のお話の中では、山形県の中でも地域毎の違いがあり、この6年半の間に、避難者の状況や心境が大きく変化したことを知ることができ、とても勉強になりました。（H.S）

★ 山形県は、被災者を受け入れる都道府県の中で、最も支援に力を入れている県の一つだと思います。被災者が苦しいのはもちろんですが、支援する側も、苦労や問題を多く抱えていることを知りました。（K.A）

★ 現場に近い方の声を聴けたことが、大変有意義でした。多田さんありがとうございました。（Y.N）

★ 山形市に子ども3人連れて、2年半母子避難していました。「うえるかむ」を見ると、山形でたくさん助けていただいたことを思い出します。支援者の方たちが、こんなにも避難している私たちのことを真剣に考えてくれたことを改めて知りました。福島で、自立してがんばって生きていくことが、山形のみなさんへの恩返しになると思うので、今の自分にできることを精一杯やりたい!! と思います。ありがとうございました。（M.T）

★ 山形に避難されている人の現状をご紹介いただき、とても有益でした。（Y.I）

★ たいへん勉強になりました。また、長期にわたる支援ありがとうございました。「収束図」をどう描くか、という課題、とても重いな、と思いました。（Y.K）

★ 避難者の避難理由を山形県の地域別に考察していたのは、多田氏だから出来たことだと思う。南相馬市の避難者が、“海を見たい”と庄内地域に避難したのは、印象深い。（T.K）

★ 被災3県に隣接する山形県の拠点としての重要性を改めて認識でき、山形への避難者の気持ちに寄り添う、その活動に感銘を受けました。（S.S）

★ 支援団体として活動していた人たちが帰還して消えてしまったり、再孤立におちいってしまったりという事例が寂しかった。ただ結成するだけでなく、どのような構成にするか、活動内容をどうするか等、考える必要があると感じた。（Y.Y）

★ 山形県での支援の流れがくわしく分かった。山形県の支援団体の特徴が分かった。山形県の話聴けて良かった。（M.O）

★ 2014年より山形の避難者の方々の交流会や支援者のつどいには参加させていただいておりましたが、その前のお話は初めて聞くことだらけでした。今後も情報を共有しながら、避難者支援に取り組んでいければと思います。(H.S)

★ 長年にわたって避難者支援をつづけていただいていることに感銘を受けました。(J.M)

★ 1～2年目、「逃げた」罪悪感、「自主」後ろめたさ、山形に馴染めない、「息をひそめている」、孤立、経済的不安、再就職・・・というのは、確かにそのようになるだろうと思います。・・・→それ以降、離婚、疲労感までなってくると、生きていくのが嫌になりそうです。その地域に馴染んで住んでいこうと思う人は生活力すごいと思います。私は、自主避難しても、帰りたい人達のグループに入りそうです。(S.S)

★ (1)#116フォーラム開催して頂き有難うございます。(2)「うえるかむ」の1～2回/月の発刊は素晴らしい(当方は1回/月の地域宛福祉だよりの発刊がやっとなです)。(3)発表を聞いて東北以外の方が当事者の困窮を知らなさ過ぎるは何とかならないのでしょうか(オールジャパンでガンバローの形にするには、どうしたら良いのでしょうか)、(4)世の中が助け合い→我欲→知らんぷり社会へと移行しており、何とか助け合い(互助・お互様)に戻す為にはどうしたら良いのでしょうか。(T.S)

◆◆◆◆【会場個人カンパありがとうございました】◆◆◆◆

第116回ふくしま復興支援フォーラム(10月5日)の会場で、カンパ1,000円をお寄せいただき、ありがとうございました。また、個人のカンパとしてお二人から計2万円の寄附をいただきました。ご報告とともに、御礼申し上げます。(今野)

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

【会計報告】(2017.10.3現在)

「収入」

|                  |                                    |
|------------------|------------------------------------|
| 2017.9.1まで累計     | 65,456円(第2期(2016.10.27～)繰越 7,106円) |
| 会場カンパ(2017.10.5) | 1,000円                             |
| 個人カンパ(2017.9.30) | 20,000円                            |
| 計                | 86,456円                            |

「支出」

|                       |         |
|-----------------------|---------|
| 2017.9.10(会場費121まで)累計 | 52,580円 |
| 会場費(116)              | 1,000円  |
| 報告者旅費補助(20171005)     | 10,000円 |
| 計                     | 63,580円 |

「残金(現在高)」2017.11.5 22,876円

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

**【予告】 第118回 ふくしま復興支援フォーラム**

日 時 2017年11月30日（木） 18時30分～20時30分

テーマ 「新潟での広域避難者の現状と支援の課題」

報告者 松井克浩 氏（新潟大学教授）

会 場 福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」

小活動室1-2 MAXふくしま4F（福島市曾根田町1-18）

<今後のフォーラム開催日予定>

12月13日（水） 渡邊純氏（AOZ大活動室3）

12月21日（木） 二階堂晃子氏（AOZ大活動室1）

1月18日（木） 荒井 聡氏（AOZ大活動室1）

2月8日（木） 仲井康道氏（AOZ大活動室1）